
からっぽ詐欺師と嘘の世界

空閑終

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

からっぽ詐欺師と嘘の世界

【Nコード】

N8947Y

【作者名】

空閑終

【あらすじ】

精神病患者数、自殺者数、犯罪者数、自然災害数が過去最多とされる20××年 有名占い師から「世界終了」の予言が世間に放たれた。疲れ切った現代の人々はその予言を、殆どの人が疑わず信じた。しかし、そんな世界をどこか冷めた目で見つめる少年 稍 仰木彰は、ある時、巫女をしている同級生 加藤夜輪梨から、「世界は終わらない」という予知を告げられる。神を信じるか、世界を信じるか 自身を詐欺師と呼ぶ少年の、現実を真実一色に塗り替える為の物語。

(1) 世界終了

家に帰って唾然とした。

「何だよこれ……！」

胸に留めるだけにしたかった言葉が、開いた口から洩れる。

心当たりもないのに、勝手に頭が今までの事を思い出し始める。

いつもと変わらず学校から出て、僕は家に入るためカギを開けて

……。思い出しても意味がない事に溜息を吐きだし、とりあ

えず冷静さを保とうとしてみる。

そして、荒れに荒れまくった自宅を、真っ黒な目で見つめた。

「……ただいま」

ひとり呟くように響かせる声が、ひどく空しい。

感情さえ押し殺して「いつも通り」を貫こうとする僕は、もしかし

たらとてもおかしいのかもしれない。

けれど、それも僕なのだ。

今更何を言ったところで、もうなおるような性格じゃない。

海外出張中の両親を思い出して申し訳なさに涙が浮かびそうになる

が、それをこらえてドアのカギを内側からかける。

自然と漏れる溜息に逆らわず、若干大袈裟に息を吐き出して。

「いつも通り」、僕は家の中へ踏み込んだ。

「酷いなこりゃ……」

無言の冷たい時間が嫌で、わざと声を出して心情を晒してみる。

全ての部屋のドアは開けっぱなしで。

衣服等タンスの中の物は殆ど乱雑に床に散らかされて。

毎日掃除を欠かさず、綺麗さを保っていた自分の家だとは思えない。

見てみると自分の部屋の窓があいていたから、なるほど此処から何

者かが入ってきて、そしてこうして、出ていったのだろうと、納得

した。

これからは窓のカギまでチェックしてから出かけないと……。

いきなりの惨状に掃除する気も起きず、まずテレビをつけてみた。画面に映るアナウンサーのお姉さんが、淡々とどこかの現実を読み上げている。

『精神病患者数、自殺者数、犯罪者数、大規模な自然災害数が過去最多を迎えていた事が判明しました』

「ボロボロだな、この世界」
なんとなく言いながら、悲しくなる。

「そういえば、何か取られたものとか無いのか……」

僕は無くなった物を探そうと、つけっぱのテレビに背を向け 緊急速報の音を聞いた。

思わず振り返る。

『ニュースの途中ですが、只今速報が入りました』

『今年12月10日に世界は終わると、占い師の奈割ルピ（なわりるぴ）さんが』

奈割ルピ……。

最近増えてきた自然災害なんかの日付を全て当てたことで有名になった、現役占い師の女性だ。

画面がアナウンサーから、その奈割ルピの映像に変わる。

カメラのフラッシュがばちばちと、彼女を照らす。

『確かに見えたのです。間違いありません。今年12月10日に、世界は終わる 世界終了の時が来るのです』

記者がさらなる情報を聞き出そうとしているようだが、彼女、奈割ルピは『そんなに急に聞かれては、見えるものも見えません』と胡散臭く断っていた。

心の中で、「そんな終わるわけないだろ」と笑う半面、案外当たっているかもしれないとも思う。

精神病患者、自殺者、犯罪者、自然災害の数がどれも過去最多を記録してしまった現代、もう何処で何が起きてもおかしくはないだろう。

僕だっけこうして空き巣に入られてしまったし。

誰もが闇と病みをもっている、疲れ切った世界だし。

「……………」

………そういえば、同じクラスに加藤……。

「あいつ、予知能力があるとか言ってたっけ。神の音がどうたらこうたらって……」

加藤とは小学生からの付き合いであり、それ故それを聞いたのは小学生のころだった。

当時は皆加藤の言う予知能力を笑っていたが、その言葉を覚えていた僕は知っている。

加藤は今年起きた大災害の日付を、確かに当てていた事を。

加藤は笑われて以来その手の話をする事は無くなってしまったけれど、あれがまぐれじゃなかったとしたら、奈割ルピの言う世界終了についても何か知っているかもしれない。

明日聞いてみようと思いつつ、僕は無いもの探しを始めた。

もともと物の少ない家だ。

何かないのならすぐに気付くそんなものだし　　というか、そんな

家から犯人は何を取っていったんだろう？

疑問符を浮かせながら、掃除も同時進行させていくのだった。

頭の隅に、世界終了の予言をひっかけながら　　。

(2) 嘔吐き

「……何も、無くなってない？」
家中隅々探しまくったが、無くなっているものは見つけれなかった。

やっぱり僕が気づいてないだけかもしれないけれど、見つからないものは見つからない。

仕方ないかと呟いて、僕は家の中をぐるりと見回した。

あれから若干雑にはあるが掃除を終えたので、帰ったばかりのころと比べると「いつも通り」に近づいたように見えた。

これ以上はどうしようもないので、携帯で時間を確認すると、現在はどうやら20時05分らしかった。

……そろそろ、あの人が来る時間だな。

僕は台所に行き、掃除したりないところが無いか見て回った。

そんな事していると、インターホンが鳴った。

「あ、はい！ 今開けます！」

駆け足で玄関行つてカギを開け、ドアを開く。

ドアの外には、小武海渚さんこむかいなぎさがいた。

「やあ彰くんー、お邪魔するよー」

「はい、いつもありがとうございます……！」

小武海渚さんはお母さんの友達で、出張が多い両親の代わりにこうしてご飯を作りに来てくれる女性だ。

確か今年で25歳になるはず……だが独身。

彼氏募集中とか言っていたっけな、立候補してみようかね。

「私は年上好みなの」

「はいいつ！」

心を読まれた……だと……！

いろいろはいつたスーパ一の袋を台所までもっていきながら、小武海さんが此方をニヤニヤ見てくる。

「変な事言つてやろうつて顔してたわよ」

「そんなばかな」

「わかりやすいもんねえ、彰君は　ところで、彰君」

小武海さんを迎え入れてドアのカギを閉めると、小武海さんは袋から野菜などを取り出しながら訊いてきた。

「今日、家散らかしたの？」

「えっ？」

思わず疑問符のついた言葉を返してしまう。

「いや、彰君が綺麗好きじゃない？」

その割になんか……今日は、ねえ」

言葉を濁し、小武海さんは苦笑いした。

僕は本当の事を言おうかどうか迷つて、結局

「ああ、今日は探し物してて……その時に」と嘘を吐いたのだった。

小武海さんは「そっか」と言ってくれた。

わかってくれたようだ。

僕は台所を通つてリビングのソファに腰掛けた。

「探し物つて何よー、テストでも隠してた場所忘れた？」

「なっ……僕は生まれてこの方満点しか取つた事のない男ですよ」

「はいはい、そうでしたねー」

ううむ……上手く無視された？

小武海さんが夕食の準備をしている間、僕は今日の宿題を片付ける。今日の宿題は少ないので、すぐに終われそうだ……。

「あ、そういえば！」

ノートに教科書を写していると、小武海さんは大きな声を出した。驚いて振り向き、小武海さんを見る。

「彰君知ってるー？　あの奈割ルピが世界終了宣言つて！」

「あ、ああ……」

急に何事かと思つたらそれか……。

僕はノートに滑らせるシャーペンを止めずに頷いた。

「びつくりよねえ、今って11月26日じゃない？ どのなるのかな……」

「……小武海さんは信じてるんですか？」

「んー……」

小武海さんは少し悩むような素振りを見せたが、やがて「そうだね」と声を発した。

「もう酷い世界だしさ、此处」

「……」

「信じたくもなると言うか、やっぱり？ って感じかな」

「なるほど……」

確かに、そうかもしれない。

僕も心のどこかでやっぱりそうなのかと頷いているのかもしれない。それが普通の反応だとしたら、僕の反応も普通のそれであってほしい。

「彰君は信じてないの？」

小武海さんからの小さな質問。

僕は、何故かシャーペンの動きが止まるのを感じた。

何で手を動かそうとしないんだろっ、僕は。

「……僕は、いや、僕も同じように思いました」

「やっぱりそうだよねー」

こんなところで嘘しか言えない僕もまた、普通なのだろう。

普通の反応を夢見る普通の一般人。

僕は宿題に戻った。

「今日はカレーだよー」

小武海さんの明るい声に呼ばれ、僕は席に着いた。

「材料が安かったのですねー。これならばらくおいても大丈夫だし」

「いつもすみません……」

「子供が変なこと気にしないの！ 中学生で今大変な時期だろうし、少しお手伝いしてるだけよ」

うう、そう言われると勉強しないといけなくなる……。

「勉強しなさいね」

「は、はい」

テレビではバラエティ番組が流れて、カレーを食べながら小武海さんが偶に笑っている。

最初は家族でもない人の前でご飯を食べるのには中々抵抗があったのだが、今はもう慣れた。

正直、今では小武海さんといるのは楽しくて、良い時間だと思えるほどだ。

小武海さんは僕が食べ終わると、食器を洗うところまでしてくれてから帰った。

謝ると、「そんな事言わないの」と小突かれた。

空き巣に入られた事を告げられないまま帰らしてしまった事を後悔はしていない。

こんなんだから嘘を吐くのがやめられないのだと、今少しだけ自分に怒りたくなっただけだ、まあそれだけだ。

僕はお風呂に入るため、着替えの準備をした。

(3) 情報

風呂というかシャワーで済ませるのが基本なので、男だからという事を抜いても上がる時間は速い。

適当に済ませてあがると、つけっぱなしのテレビから奈割ルピの声が聞こえた。

『今年12月10日に世界が終るのは間違いないでしょう。』

まず、全国各地で地震が頻繁に起こるようになります。

それから 『

頭をタオルで拭きながらテレビの前まで来て、よくそのテレビを見してみる。

奈割ルピはのフードの付いた、紫のローブの様なものを羽織って会見に臨んでいた。

はつきりいつてめちやくちや胡散臭い外見だ。

それに加えアニメ声であるからなのか、いまいち真剣味が伝わらない。

ああ、これは別にアニメ声の人を否定してるわけではない。

寧ろ僕はアニメ声大好きというか若干声フェチの気があるので、どちらかというアニメ声というのは褒め言葉の部類に入るくらいなのだ。

……まあそれはさておき。

「占い師、ねえ」

僕は占いとかが、あまり信じない部類の人間だ。

女子なんかは占いとかが好きな子が多い気がするけれど、さっきも名前を出した加藤^{かとう}つて全然そんな雰囲気ないんだよね……。

加藤 加藤夜輪梨^{かとうよわり}。

家はここらで有名な神社で、そこで巫女をしている女の子だ。

あまり話した事はないので詳しい事はわからないが 一匹狼タイプなのは間違いないだろう。

誰かに媚びたり、誰かをつるんだり、そういう事をしているところを見た事が無いし。

「……………」
話しかけたら、無視されたり変な事言われたり……しないよな？
世界終了の事を聞こうと思うが、まさか怖い事には……。

「僕どんだけびびってるんだ……………」

そうそう、相手だって人間だ。

それも小柄な女の子だぞ？

精神的なダメージに弱すぎる僕が、偶にこうして嫌になる。
けれどそれだって僕の一部で、現実で。

愛せなくとも受け入れなくてはならない事実なのだ。

だしっぱにしていた宿題を回収して、テレビの電源を消した。

こちらの電気も消して、僕は自分の部屋に入る。

宿題の終わって無かった所を集中して早く終わらせ、時間を確認。

「22時34分、か」

夜更かし常習犯の僕には早すぎる時間だ。

僕はパソコンの電源を入れた。

ネットで世界終了の事について何か書かれていないかと思ったのだ。
パスワードを入れ、ボックスに「世界終了」と入れて検索する。

32,800,000件出た……………！

当然僕が探しているのとは違う物も入っているのだろうが、何この数字。

世界にはこんなに厨二病が溢れかえっているのか？

「って、ああ、最近もあつたんだよな」

奈割ルピの少し前に、ネットでだけ注目されたようなされてないよ
うな、そんなニュースが。

「言ってる奴だけでこんなに対応も変わるのか……………」

何か恐いなあと思いつつ、目当ての情報を探してみる……………が、あま
り良い物は出てこない。

流石にこの調子で全件まわるわけにいかない、というかそれは少し

ふざけている。

今度は「奈割ルピ」で検索してみた。

すると、なんと彼女がやっているブログを発見することが出来た。

ブログタイトルは『奈割ルピの占い部屋だお（ ）』……あらまあ。

因みに記事はギャル文字全開だった。

いったいどんな人間なのこの人は。

慣れないギャル文字を我慢して今日の記事を見てみると、今日の会見の事が書いてあった。

そしてお目当ての、世界終了についても と思ったのだが、自身の感想ばかりだった。

終わるの怖いとか終わるの嫌とか。

そんな事が顔文字や絵文字、そしてギャル文字で書き綴られていた。コメント欄はどうなっているのかと目を通して見ると、案の定ギャル文字の多さに心が折れた。

辛いので、「奈割ルピ」で某巨大掲示板サイトを見てみる。

世界終了を喜ぶ人らばかりだった。

「……駄目だ……」

二ユース以上の情報は手に入りそうな気配がない。

やはりここは素直に待って、明日、加藤夜輪梨に話を聞いてみた方がよさそうだ。

その結果が残念だったとして、別に興味だけで調べているのだから後悔も何もない。

僕はパソコンをシャットダウンする。

今日はいつもより早めに眠ることにした。

時間割を整え、布団を敷き、最後戸締りを確認して

「おやすみ」

最後の最後、電気を消し。

誰にともなく言って、瞼を下ろした。

(4) 加藤夜輪梨

翌日、僕はいつもより早く家を出た。

これは単にいつもより早めに起床してしまったからであって、深い意味はない。

本当なら加藤夜輪梨かとうやわづりの来る時間に合わせたかったのだが、その時間もつかめていないし……必然、マイペースとなった。

まだ静かな教室へと足を踏み入れる。

やはり来るのが早すぎたかなと時計を見れば、7時35分だった。学校が開くのは7時30分。

「そりゃ早いわ」

「早いわね」

誰もいないはずの教室から声がして、驚いて、声がした後ろの方へ体を向ける。

そこには、黒い長髪を揺らしながら席へつこうとする、加藤夜輪梨がいた。

「稍仰木君ちやうぼくって、いつもこんなに早いの？」

「え、あ、いや……今日はたまたま、早く目が覚めちゃって……」

「あら、そうだったの」

帰る頃には眠いわね、とにこりともせず僕の横をすり抜け、自分の席に座る加藤。

もしかしたら今がチャンスかもしれない、と、僕は勇気を振り絞って加藤に話しかけた。

加藤の机の前にお邪魔して。

「あ、あのさ、加藤？」

「何かしら」

此方をきりつと一直線に見つめてくる加藤の目に怯みつつ、僕は言葉を紡ぐ。

「お前の予知能力って、まだあるのか？」

「さあ……どうかしらね。 稍仰木君は、何でそんなこと訊くの？」
「昨日、ニュースで、ほら……あの奈割ルピが世界終了を宣言した
だろ？ だから、もしそれが本当なら、加藤も同じような事を予知
してるんじゃないかって」
そう思つて、と続ける語尾が段々弱つていく。
加藤は「そんなこともあつたわね」と相変わらず動かない表情のま
ま言つて、教科書やらの整理を始めた。
「正直に言つと、世界は終わらないわ」
「え……？」
「しかし驚いたものね。」

あんな小学生の頃の話を、まだ覚えてる人がいただなんて。
しかも、こうして予知能力を信じているだなんて。 稍仰木君つて
バカなの？」

「ば、バカつて……！ 僕はただ、本当に世界が終るのかどうか気
になるだけだよ」
むっとして言い返すと、加藤は「へえ」と教科書から此方を見た。

「そんなに気になるの？ 世界が終わるとか」

「加藤は、気にならないのかよ」

「私？ 私は、そうね。」

奈割ルピが言った事は嘘だと思つているから」

「何でそう、言いきれるんだ……？」

やけにずばつと言いきつた加藤に、静かに訊いてみる。

加藤はしらつとした表情で、だが若干得意げな響きを持たせて、

「私、自分の目で見たものしか信じないから」
と言つたのだつた。

「……そ、そんな理由？」
思わず本音が漏れる。

そんな僕に、加藤は目に見えて嫌そうな表情を浮かべた。

「稍仰木君みたいに、周りに嘘ついて話が合うふりをしてる人間に
言われるのは不快だわ」

「なッ……!!」

凶星だけに、言い返せなかった。

握りしめたこぶしが、震える。

「た、確かにその通りだよ……ごめん」

「……あー、それよ。」

そういうのが気に入らないんだわ」

俯く僕を前に、加藤は机を蹴り上げた。

静かな教室に、暴力的な音が響く。

「誰かとの話し方にまでつべこべ言う気はないわ。」

ただ私の前ではそんな弱気な態度でいなくてくれるかしら。

今まであなたも含め人間観察していたけれど、本当一番イライラする人間なのよ、あなたは」

「な、何でそんな事……」

立ち上がり、胸倉を掴まれた。

女の子にこんなことされた経験ある人って少なくないか！

心臓ばくばくな僕から視線をそらさず、怒気を隠そうともしないで加藤が口を動かす。

「私、嘔吐が大嫌いなもの。」

いや、上手な嘔吐きなら好きよ、言ってる事が本当のように聞こえるもの。

でも、あなたみたいな下手な嘔つきは大嫌い。

何媚びてんのよって思うわけなのだわ」

「わ、わかった！ わかったから！」

僕が言うと、加藤は手をおろしてくれた。

「わかった！ もうお前の前では嘔つかないって約束するから！」

「ってという言葉がもうそれ自体嘔じゃない」

言い返せない僕が確かにそこにいて。

「もういいわ、疲れた。」

二度と話しかけてこないで」

何故か好感度を滅茶苦茶下げてしまった僕もそこにいたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8947y/>

からっぽ詐欺師と嘘の世界

2011年11月27日03時20分発行